

氏名 (本籍)	澤田 茂保 (富山県)		
学位の種類	博士 (情報科学)		
学位記番号	情博第 204 号		
学位授与年月日	平成 13 年 9 月 13 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
研究科, 専攻	東北大学大学院情報科学研究科 (博士課程) 人間社会情報科学専攻		
学位論文題目	A Cognitive Anatomy of Agentive Events (動作主出来事の認知的分解について)		
論文審査委員	(主 査)		
	東北大学教授	福地 肇	東北大学教授
	東北大学教授	関本 英太郎	東北大学助教授
	東北大学助教授	菊地 朗	輪田 稔
			浅川 照夫

論文内容要旨

第 1 章

第 1 章では、身体部位を介在させて外界の事物に働きを加える出来事の認知的な分析を試みた。ヒトが、外界のモノを移動させたり、モノの形状に変化を加えたりするときは、身体部位を経由して力を伝達する必要がある。これはヒトの世界認識の一部を構成する基本的な認識である。この観点から、ヒトがモノを kick する出来事を認知的に分析してみると、三つの下位出来事が存在することが分かる。次の文で考える。

(1) John kicked the ball across the field.

この出来事は、John が足を動かす、足がボールに接触して力を加える、そして、ボールが移動する、という構成になる。これをそれぞれ分解的に表すと次のようになる。

- (2) a. ACT([JOHN], [FOOT])
 b. AFFECT([FOOT], [BALL])
 c. GO([BALL], [ACROSS([FIELD])])

(2a)は動作主が身体を動かす出来事を抽象的に表している意味構造である。これを Motion 部と呼ぶ。(2b)は身体の接触によって力が伝達される出来事を表す意味構造で、Force Exertion 部と呼ぶ。最後に身体部位によって力が伝達される結果生起する出来事を Result 部と呼び、上の例の場合は移動なので、GO によって表示されている。

このように身体部位の接触による力の伝達がある出来事を三つの部門、Motion, Force Exertion, Result に分けると、組み合わせは全部で 7 つある。このうち本章の課題である身体の部位の動きに係わる Motion が含まれるのは、次の 4 つのパターンである。

- (3) a. John kicked the door open.(Motion/Force Exertion/Result)
 b. John kicked his foot against the chair.(Motion/Force Exertion)

- c. John kicked the little snow off his foot.(Motion/Result)
- d. John kicked at the desk.(Motion)

(3a)は Result 部が状態変化で、(1)と同じである。これらは三つの部門(Motion/Force Exertion/Result)が全て揃っているパターンである。(3b)は足がイスに当たったことだけで、イスに対する変化は認識されていない。従って、Result 部はない。これは Motion/Force Exertion が結びついたパターンである。このパターンは偶然に接触した読みを表す場合が多い。(3c)は、蹴る動作によって、足に付着する雪を落とすという意味であるから、身体部位の接触による力の伝達(Force Exertion)はない。しかし、John は雪を落とそうとして蹴ったのであるから、Result はある。従って、Motion/Result が結びついたパターンである。最後に(3d)は足を揺すって机を蹴っているというような読みであるが、これは机に対する変化を意図したわけでもないし、力の伝達を意識したわけでもないで、Motion が他の二つとは切り離されているものと分析した。

このように身体接触による力の伝達が含まれる出来事を認知的に分析することで、三つの意味部門が明らかになり、その組み合わせにより、出来事の認識の仕方がうまく説明される。また、Jackendoff の概念意味論の表記法を援用して、可能な意味表示を提示した。

第2章

第2章は、前章の議論をふまえて、動詞の多構文性についての理論的な論考である。第一章では kick が複数の構文型に現れる事実を見たが、このような多構文性は二つの説明装置がある。

その一つとして、語彙意味的アプローチでは、統語構造がその主要部によって決まるという投射の原理を前提にしているので、複数の統語環境に現れる語彙は原則として多義語となる。シンタックスの自律性をテーゼとする語彙意味論的アプローチでは、動詞はそれが現れる統語環境によって意味を変える。しかし、直感的に意味が変わったと実感されるような場合もあるが、強引な意味変化を想定しなければならない場合もある。

このような考えに対して、構文論的なアプローチは文の意味は構造の意味と主要部の意味との協調で決まるという素直な考えである。このアプローチは認知言語学の様々な論者がそれぞれの立場で論じているが、基本的な考えは、形式と意味は表裏一体である、文の意味は動詞の意味と構造の意味の相互作用である、ということである。

本章では Goldberg の「項構造構文論」を前提にしつつも、語彙の支えの全くない抽象的な構文の設定に疑問を投げかけて、構文としてレキシコンに記憶されるための条件を一つの指針として提案した。それは語彙知識の一部として登録される構文は、少なくとも語彙の支えがなければならない、というものである。

第3章

第3章では、第一章で提案された認知的な動作主的出来事の方法を、身体部位を使った継続的な身体接触による力の伝達が含まれる動作主出来事に適用して、その妥当性を示した。瞬時的な力の伝達としての動作主的出来事と同じ構造が見られることが分かる。また英語の特殊な構文に見られる fake objects の特性を、直接物理的な力が加わらない対象を指示するものが目的語に現れている例として分析できることを主張した。力の伝達の様式が異なるだけで、第一章の

動作主的出来事と本章の動作主的出来事は認知的な理解では同一のものであり、それ故に同一の分析ができる。

さらに、身体部位というのは絶対的な概念ではなくて、認知的な概念である。例えば、blow は「息を吐く」意味を持つが、項構造的には息が身体部位の認知的な拡張であるような様相を示す。これは空気を使って、外界の対象に働きかけをするという日常的な行為が、身体の働きと並行的に理解されていることを示している。

第4章

第3章は身体の移動を表す動作主的出来事を論じた。モノの移動は本来点と線の記述であるが、ヒトが移動する場合は体を使って移動するのであるから身体性がある。身体性のある移動では、移動に関わる下位出来事と身体の動きに関わる下位出来事が認知的に分離できることを主張して、身体の動きに係わる部分は、Motion に相当するものと考えた。

ヒトが身体を使って移動する場合は、身体が動く部分と身体が経路を移動していく部分に分かれるが、これらは同時に前景化されることはない。身体の動きの前景化と身体の部位が目的語の位置に生起することと関連している。一方、経路表現が現れることは、移動が前景化されていることである。この場合は身体の動きが背景化される。

また、身体部位による力の伝達に関わる出来事と身体の移動の出来事は基本的には異なる出来事であるが、同一の語彙の中での交替を論じた。

第5章

第5章では、身体の動きによるメッセージ伝達の出来事の分析を試みた。これは「手を振る」ことで、別れや注意を促したりする行為に関わる出来事である。このような出来事は身体性を直接含み、身体部位が目的語に現れることで、動き自体の前景化が起こる。このような身体の動作は外界の事物に対する身体接触的な働きかけを伴わないが、そのかわり一種のメッセージ性を帯びてしまう。

本章では、身体の動作に関する動詞群が at NP の項をかなり生産的に取り、それをどのように説明するか、と言う問題を考察している。この項の現れを個々の動詞の意味特性として述べる形での語彙意味論的な取り扱いは一見一般性を見失う。身体行為の動詞が、一種のメッセージ伝達であるという認知的な理解を基礎にした構文論から説明を試みた。

具体的には、身体行為の一つとしての「なげる」行為を表す概念述語(THROW)を、基本述語からのコンパイル形として存在することを主張して、at NP が現れることで概念構造で主節の構造として THROW が構成されると仮定した。つまり、身体動作の出来事は概念構造上で「メッセージの投げかけ」の構造であると分析した。

第6章

第6章で論じたような身体動作はメッセージ性を帯びているが、人は身体を使ってメッセージを伝えるより、もっと直接的な手段を持っている。それは「声」によって、メッセージを相手に伝えることである。

本章では、声を発生する行為も、認知的には身体行為であり、身体動作の動詞と同じような統語的特徴を有し、それが THROW という述語の構成で記述できることを示した。本章の声の発生に係わる動詞群の分析は、従来議論されることのなかったコミュニケーション動詞の意味分析への道筋を示唆するものである。

本章で考察された新しい知見は、to NP と for NP を項に取る現象である。to NP については、メッセージの単なる投げかけからコミュニケーション伝達の出来事への移行に対応することを主張した。for NP については、メッセージの受け手という単なる方向性をもつ項ではなく、概念的には節構造を持つ存在であるとし、「期待的な出来事」と名付けた。

また、at NP の分析を基にして、従来 conative 構文と呼ばれてきた文型が、「動作を投げかける」概念構造に対応付けられることを主張した。

第7章

第7章では「ヒトがモノをさがす」出来事を認知言語的な立場で分析を試みた。「さがす」ことは、意志を持った主体が行う行為なので、動作主的出来事である。「さがす」ことは身体性を連想させるが、それは単なる肉体の動きと言うより知覚機能の動きとして捉えられる。その意味で、身体性というのは必ずしも物理的な身体の動きに限られるのではなく、概念上の広がりを持つ。

本章の議論は、「さがす」出来事に含まれる意味参加者としての「動作主」、「さがす場所」、「さがす対象」について、その統語的な特徴と意味的な側面を論じた。「さがす場所」は、単なる物理空間上の場所ではなく、視覚や触覚のような知覚機能が仮想的に移動する場所と考えた。「さがす対象」については、それを表す項が for で現れることに着目して、それが前章で提案された「期待的な出来事」であることを主張した。

また、モノをさがしたり、見つけたりする行為が、手を伸ばしたり、手をつかんだりする身体的な行為と認知的な関連があることを指摘して、意味構造の提案を試みた。本章での考察は従来意味分析が難しかった心理的な過程に属する出来事を身体的な行為と並行的に分析できることを示している。

論文審査の結果の要旨

言語構造は人間の世界認識のあり方と密接に関わり合う。特に、手・足・目等の身体部位による行為や動作が積極的な役割を果たす外界の出来事は、人間に共通する認識の基盤であり、その認知構造が言語の意味構造にも直接的な形で投影される。本論文は、身体の動きに関わる動作主行為や動作主移動の言語現象を、身体性を組み入れた認知的意味分析の観点から説明しようとしたもので、全編7章と結論から成る。

第1章は序論であり、本論文で採用する意味分析の概略を述べている。ここでは、瞬時的な動作主行為を、身体部位の運動を表わす Motion 部門、身体部位の接触による力の伝達を示す Force Exertion 部門、および二部門の帰結を表わす Result 部門の三つの下位部門から成る出来事として捉え、これら下位部門の組み合わせよって、各種の英語構文がもつ意味構造を明らかにしている。

第2章では、主張する分析案を語彙意味論や構文文法論と比較して、その優位性を説いている。

第3章では、継続的な動作主行為に関し、力の伝達の有無と身体部位の認知的拡張により、全ての動作主行為が、提案する分析で説明できることを論じている。これは言語学的に重要な知見を含んでいる。

第4章では、動作主移動を身体動作と身体移動の二つの下位部門に分析し、それら下位部門の意味の前景化について論じている。

第5章では、身体運動を伴うメッセージ伝達を動作主行為の観点から分析している。この種の伝達文は、身体行為の意味要素 THROW が関与する意味構造をモデルにして解釈され、身体部位を動かすことによって、メッセージとしての信号を相手に投げかける身体運動として捉えられる。これは、複合的出来事の言語化現象に関して、本論文の提案する分析が高い説明力を有することを示している。

第6章では声によるメッセージ伝達を、THROW が関与する意味構造から分析する。この分析によれば、発声動詞が at NP, to NP, for NP を取る場合に生じる意味の違いが説明可能であり、ここには記述的、説明的にも極めて重要な知見を含んでいる。

第7章では意味要素 SEARCH が関与する出来事を、ある種の知覚領域内において視覚・触覚・嗅覚等の知覚機能を運動させる動作主行為の一つとして捉える分析を提示している。ここでは、心理的認知過程と身体行為との関連性を論じて、新しい意味分析の可能性が展開されている。

最後に結論と意味論の今後の展望が述べられている。

以上要するに、本論文は、言語による概念構造化の問題を、身体部位の運動を基盤とする身体行為様式の認知的な観察から論じたもので、情報科学および認知言語学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。